hm

ハヤカワ・ミステリ文庫〈HM❷－2〉

緋文字

エラリイ・クイーン
青田　勝訳

早川書房

訳者略歴　明治35年生，昭和2年東京大学英文科卒，英米文学翻訳家　主訳書「七つの欺瞞」マッギヴァーン「十日間の不思議」「最後の女」「真鍮の家」クイーン，（以上早川書房刊）他多数あり

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel

緋文字

〈HM②-2〉

昭和五十一年四月二十日　印刷
昭和五十一年四月三十日　発行

（定価はカバーに表示してあります）

著者　エラリイ・クイーン
訳者　青田勝
発行者　早川清
発行所　株式会社　早川書房
郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二丁目二
電話東京（二五四）一五五一（代）
振替番号　東京・六一四七七九九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします

印刷・三松堂印刷株式会社　製本・株式会社明光社

ハヤカワ・ミステリ文庫
〈HM②-2〉

緋文字

エラリイ・クイーン
青田　勝訳

早川書房

386

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1976 Hayakawa Publishing, Inc.

THE SCARLET LETTERS

by

Ellery Queen

Copyright © [redacted] by
Ellery Queen

Translat[redacted]
Katsu Aota
Published 1976 in Japan by
HAYAKAWA PUBLISHING, INC.
This book is published in Japan by
direct arrangement with
SCOTT MEREDITH LITERARY AGENCY, INC.

ミス・バチェラーは、姦淫（アダルトリイ）の罪を犯したために、胸にAの文字をつけるように命じられた。

――筆者不詳。メイン地方の記録（一六五一年）

ナサニエル・ホーソーンは、この掟にもとづいて、『緋文字』の物語を書いた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

A……九
B……七四
C……九二
D……一〇九
E……一三八
F……一六八
G……一九一
H……二〇二
I……二二六
J……二三三
K……二六五
L……二九五
M……
N……
O……
P……
Q……
R……
S……
T……
U……
V……
W……
X……
Y……
Z……
解説……二九五

緋文字

登場人物

ダーク・ローレンス……探偵小説作家
マーサ・ローレンス……ダークの妻
ニッキー・ポーター……マーサの親友
ヴァン・ハリスン……舞台俳優
レオン・フィールズ……コラムニスト
エラリイ・クイーン……犯罪研究家
リチャード・クイーン……エラリイの父。警視

A・・・

結婚四年目を迎えるまでは、ダーク・ローレンスとマーサ・ローレンスの二人は、ニューヨーク中で最も幸福な夫婦として友達から羨まれていた。

このおしどり夫婦を知っている者は、だれもが申し合わせたように、「本当に気持のいい面白い若夫婦だ」という。知らない者が聞くと、この言い方は年齢の点でやや奇異に感じられる。というのは、この夫婦は二人とも三十代で、生物学的に見れば決して血気盛んな若人とはいえない。しかもマーサの方がダークより二つも年上なのだ。だが、だんだん親しく交際するにつれて、例の描写がそれほど気にならなくなるのであった。ダークは、ボヘミヤの屋根裏の暗いロマンティックな雰囲気の中から出て来たような男だったし、マーサの方は、窓の縁に来てとまった鳩のようにふっくらと肥って、可愛らしい顔をしていた。この二人が面白い、気持のいい夫婦だということについては、だれも異存がなかった。ダークは作家だった。作家というものは、文筆に縁のない連中にとっては――ローレンス夫妻の友人達はその大部分がそういう人達だったが――映画スターか、斧で人を殺した殺人犯みたいに、別世界から来た珍重すべき存在のように思われたの

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

であった。またマーサは友達に絶対的な人気があった――つまり彼女は交際仲間の同性達に脅威を感じさせることが決してなかったからである。

とはいうものの、ローレンス夫妻を面白い好い人たちだと褒めていた友人たちも、もし過去にさかのぼって統計的に調べてみたならば、反対の証拠が案外多いのを知ってびっくりしたに違いない。ことに彼らの結婚三年目には、ダークを好い人とは決していえないような時がしばしばあった――彼は、人間の眼には全然見えないような何でもないことに腹を立てて、公衆の面前でかんしゃくを起こしたし、またウィスキーを二、三杯ひっかけた時などは、幾度となくまことに好ましからぬ人物に変じたのだった。いかに作家といえども、喧嘩をしたり、ひどく酔っ払ったりされては、かなりはた迷惑なものである。またマーサも、時によってははなはだ面白くない鳩になることもあった。そしてそれはたいていダークが好ましくない振る舞いをしたときだった。しかしながら、そのようなひと刷毛かふた刷毛のエピソードが、カンヴァス全体に描かれた画面全部に影響するほどの大事件だとはだれも気づかなかった。それどころか、この夫婦のあまりにも人間離れのした幸福な境遇が、かえって友人たちに近づき難い感じを抱かせそうになった場合などには、このような二、三のエピソードは、ローレンス夫婦もやはり普通の人間だったと人々に思い直させるのに役立つくらいだった。

エラリイがローレンス夫婦と知り合いになったのは、ニッキー・ポーターを通じてであった。もっとも、ダーク・ローレンスとはアメリカ探偵作家クラブの会合で二、三度会ったことはあったが、それはダークが彼独特の陰気なあまり売れない探偵小説を書いていたころのことで、彼がマーサ・ゴードンと結婚するまでは、格別親しい言葉を交したこともなかった。マーサとニッキ

ーは故郷のカンサス・シティにいたころからの知り合いだったが、マーサがニューヨークに出て来て住みつくようになって、再び交際をはじめた二人の女は、互いに相手のうちにそれまで気づかなかった好ましい点を発見し合って、それからというものは互いに離れられないほどの親友になったのだった。

マーサ・ゴードンは、財産を作ろうと思ってニューヨークへ来たのではなく、持ってる財産で面白く暮そうと思って出て来たのであった。マーサの母親は彼女を生むと同時にこの世を去り、精肉業を手広く営んでいた父親も、戦争中マーサが米軍慰問協会の慰問団に加わって太平洋戦線を廻っている最中に死亡したのだった。マーサはオバーリン大学（米国オハイオ州北部にある有名な大学）在学中、演劇に熱中し、その後小劇場に加わったが、ちょうどそのころ大戦が始まったのだった。父親のゴードン氏は、数百万ドルの遺産を娘に遺していた。

エラリイは、マーサが聡明で、豊かな感受性に恵まれ、しかも巨万の富にもスポイルされず、むしろ金のあるため孤独になっている女であることを知った。

ある晩、クイーンのアパートに皆が集まって雑談をしていたとき、マーサが真顔になっていった。「あたくしはみんなからとても素敵だなんていわれると、てれてしまって眼のやり場に困ってしまうの。そうするとみんなは、なお本当に素晴しいとかなんとかいうのよ」

「きみは疑ぐり深い人だな。実際素晴しくきれいだよ」とエラリイ。

「エラリイさん、あなたまでそんなことをおっしゃるのね。あたくしが幾歳（いくつ）になるかご存知？」

「マーサ、あんたはほんとうにきれいよ。別にてれることないでしょう」とニッキーがおだやかにいった。

「そうれ見給え。今度男友達とデイトをするときには、ぜひともニッキーに一緒に行ってもらうといい。このひとは不思議なほど男にかけては眼がきいているのだ」

「どうせあたくしは結婚なんては考えていませんわ。あたくしはブロードウェイのスターになるのよ。でもスターになれないうちに死ぬかも知れませんけどね」

マーサの予想は二つともはずれた。彼女はブロードウェイのスターにもならず、また死にもしないでダーク・ローレンスと知り合うことになったのだった。

マーサはしばらく前からある手を用いていた。彼女は質素な生活をし、あまり金持でない中流の人たちと交際するようにしていた。そしてダーク・ローレンスが彼女に結婚を申し込んだころは、彼女はある舞台演出家の事務所で週給六十ドルで働いていた。東三十番通りにあるエレヴェーターもない安アパートの三階に、家財道具を持ちこんで新居をかまえるまで、彼は自分の花嫁が百万長者だということを全然知らなかった。

エラリイは、ニッキーのほかの友達と同じように、ローレンス夫婦とも親しくしていたが、この夫妻の将来についてだけはどういうものかはっきり安定した感じを持てなかった。それはダークの乏しい印税と、マーサの莫大な配当収入との不均衡のためというよりは、むしろダークの情愛がうすいところからきているように思われた。ダークはエミリイ・ブロンテ（英国の女流小説家（一八一八―四八）代表作『嵐が丘』）の小説にでてくる人物のような振舞いをするのだった――気持がはげしく、むっつり屋で、どことなく不細工であかぬけがしていない。そしてときどき突拍子もなく風変わりなことをする癖があった。

ところが、マーサはダークのこの特別な性質に強く引きつけられていたのだった。この金髪の

小柄な妻にとっては、色が浅黒くて苦味ばしった大男の夫が、偉大な天分を持ちながら世に認められない悲劇的な人物に思えたのだ。要するにこの二人は、互いにすべてが反対なために引き合っていたといえよう。ダークは実際問題にせよ、また夢を描くにせよ、何事によらず自分自身のことしか考えない男だったし、これに反して、小柄ではあるが頑丈なマーサの身体中には自己本位などというものはみじんもなかった。彼が要求するものがあれば彼女が叶えてやった。彼が不機嫌になると彼女が彼の気をまぎらすように努め、彼が猛りたつと彼女がなだめた。また彼が懐疑的になると彼女が励ました。彼は崇拝の気持をこめて彼の言葉を聴いてくれる耳が欲しい。また安らかに頭をもたせかける胸が欲しい。そして母親のように彼を抱きよせてくれる柔らかな腕が欲しい。それらの要求を彼女はすべて叶えてやった。マーサは耳を、胸を、腕をさし出すことに幸福を感じていたのだ。

結婚生活を営んでゆく基礎として、これほど健全なことはないはずなのだが、実際はそうでないらしかった。三年目の終わりごろ、はたの目にもどうも様子が変だと思われ始めたのだが、夫妻はときどき他人と一緒にいるのが堪えられなくなるように見うけられた。

たいていの場合、マーサの方が先に逃げ出した。だがエラリイがだいぶ前から気がついていたことは――そしてそれはニッキーや彼がローレンス夫妻をまじえて街に出たり、パーティに行ったり、また他の人達と同席して何か賑やかな会合を催したときなどだったが――ダークがある種の気分に陥りそうな兆候が見えると、その影響に応じるようにきまってマーサが中座するきっかけを作ることだった。ダークが機嫌を損うか立腹するときは、必ず彼の浅黒い口の一端がかすかに上に引きつる。見たところでは微笑するような口もとだが、その効果は決して愉快なものでは

ない。そういうときは、マーサは何かしかけている最中だろうと、喋っているときだろうと、すぐにやめてすっと立ち上がる。そして「リンディのお店で野菜とマヨネーズを買わなくては」とか何とかいい出すのだった。エラリイが感じたところでは、彼女は何でも思いついたことを出まかせにいうらしかった。するとダークも話をやめて、無理に引き止める人々を振り切って二人揃って出て行くのだった。

ところが、時によるとダークの意味ありげな唇のゆがみが始まったときに、たまたまマーサが後ろ向きになっていることがある。そういうときには、ダークはくだらないことに腹を立てて物凄く怒鳴りちらすか、らくだのように無茶苦茶に酒を飲みはじめる。そうするとマーサが突然頭痛を口実にして家へ帰るといい出すのが通例だった。

四年目に入ると、二人のトラブルは絶頂に達した。二人が揃って人前に出ることがますます少なくなり、ダークは始終酒を飲むようになった。

それはちょうどマーサが劇場に関係のついた年だった、彼女はある劇の上演権を買い、自分が費用を出して自ら演出することになった。ダークの出席しないパーティが幾度も行なわれた。彼は舞台稽古に突然姿を現わしたり、またはレストランでマーサに声をかけたりして、必ずいざこざを起こした。マーサは演出上の細かい仕事に没頭して、友だちのだれにも会わなかった。ニッキーにさえ会わなかった。そしてその劇が失敗に終わると、彼女はまたその小さなあごをつき出して、新しい台本をあさり始めた。そのころ二人はビークマン・プレイスに面したしゃれたアパートに引き移っていたが、彼らの家で毎日なにが始まっているか近所で知らないものはないほどだった。朝といわず夜といわず喧嘩は絶え間なしで、家具の壊れる物音、泣き声、怒鳴りちらす

大声がひっきりなしに洩れてきた。

結婚生活は破れた。そしてなぜそんなことになったのか、だれにも判らなかった。

ニッキーは友だちのだれにも劣らず心を悩ました。

「なんの間違いでああなったのか、あたしには見当もつかないわ」エラリイに尋ねられて、彼女はそう答えた。

「だけどニッキー、きみは彼女の親友じゃないか」

「親友だって判りませんわ」ニッキーはしょげていった。「むろんダークが悪いにきまってますわ。あの人がエドガー・アラン・ポーみたいな真似をするからいけないのよ」

そして、早春のある美しい夜、エラリイとニッキーはローレンス夫妻の仲たがいの理由を知った。

まず皮切りはウェスターン・ユニオンの配達人だった。一日の仕事をすませてニッキーが、エラリイのタイプライターに覆いをかけているとき、彼がクイーンの家の呼鈴を押した。

「あなた宛ての手紙ですわ。しかも自筆よ」といいながらニッキーは封筒を持って書斎に入って来た。「あら、これはマーサ・ローレンスの筆蹟よ。あのひとなぜあなたに手紙なんかよこしたのかしら」

「まるで女房みたいな口振りじゃないか」とエラリイはカクテル・シェーカーをがちゃがちゃいわせながらいった。その日は口述が思うようにはかどらず、エラリイは人に愛想よくするような気分にはほど遠かった。ましてや彼がしばしば表わした苦悩の表現のたった一人の目撃者に対し

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com